ヴァイオリンという楽器の面白さが浮彫りになるとともに、日本人泰者の躍進が目立った ロン=ティボー・コンクール

高野てるみ

小林美恵

撮影・長谷川勝久

世界に名だたる音楽コンクールは、今や若き日本の音楽家たちに制覇されてしまった感がある。

チャイコフスキー・コンクールは、諏訪内晶子が優勝し、優勝該当者なしであったショパン・コンクールでは3位を横山幸雄が獲得したことはすでに知られるところだが、90年10月の末にパリで行われたロン=ティボー国際音楽コンクールでも1位、3位、5位の座を日本人が占めてしまったのだ。

ピアニストのマルグリット・ロンとヴァイオリニストのジャック・ティボーが1943年に創立したこのコンクールは、ピアノとヴァイオリン部門の審査が1年おきに行われるシステムになっており、90年はヴァイオリン部門の年であった。

ピアノ部門では過去に日本人優勝者を輩出しているこのコンクールも、ヴァイオリン部門では今回の小林美恵が歴代で初めてということになり、チャイコフスキー・コンクールと並んでの快挙となった。

10月のパリとは思えない暖かさでコートなしのパリジャン、パリジェンヌが行き交うエトワールから近い演奏会場、サル・ガヴォーとサル・プレイエルで、ロン=ティボー・コンクールの最終審査は行われた。世界18ヵ国から50名以上の若い音楽家たちが、パリの伝統あるコンクールに一度は参加し、最終審査にまで何とか生き残って、パリを代表するこのふたつの会場で演奏してみたいと応募したわけだが、それが叶ったのは6人のみだ。

ロココ調の装飾を生かしたつくりのサル・ガヴォーは小さな演奏会場だが、音響効果は抜群で、いかにもパリらしい伝統美をたたえている。最終選に残った6人は優勝の座を争って、ここで課題曲を含めた3曲を独奏、あるいはピアノ伴奏で披露しなくてはならない。そして翌日には、檜舞台であるサル・プレイエルでオーケストラをバックに演奏し、華々しくも厳格なる最後の審査を受けることになる。

演奏者は、審査員はもとより大勢の聴衆たちの目と耳に自らの演奏のすべてをさらし、会場をいっぱいに満たしている、すさまじいばかりの緊張感に耐えなくてはならない。

最終選ともなると、演奏の力量の差は極めて少なくなるので、いかに緊張感に対して平常心を保てるか、それを保つための体調維持が出来るか、つまりは自己との戦いが決め手になるのだと、演奏家たちは口を揃えて言う。

国際的な音楽コンクールでは、慣れない異国で、その土地の空気になじみ、何でもおいしく食べ、充分に睡眠をとれるたくましさが必要となってくるわけだ。そういう意味での国際感覚が要求されることになる。

前年行われたピアノ部門の演奏家が〝よりダイナミックであること〟を競ったのに比べると、今年は楽器の性質上のこともあって〝より緻密であれ〟とばかり、各演奏者は神経をとぎすましての演奏となって、前年以上に緊迫したエネルギーがみなぎった。

1位となった小林美恵、3位の西沢和江、6位のイタリア男性ドメニコ・ノルディオはメンデルスゾーン、2位のパリ生まれのフランス、ベトナム混血のステファン・トランニョックはブラームス、5位の相曽賢一朗はサン=サーンス、4位のベトナム女性、ビン・ハンはベートーヴェンを指定曲の中から選んで、オーケストラをバックに演奏した。

メンデルスゾーンの曲は誰にも親しまれている有名な曲で、耳慣れた曲ほどアラも目立ちやすく、難しいと言う審査員もいたが、これを小林、西沢のふたりは、みごとに弾きこなした。東京芸大を卒業し、すでにいくつかのコンクールで好成績をおさめ、演奏活動もこなしている小林は華麗に、まだ芸大生である西沢は、実に可憐に。

同じ曲を弾いても三人三様、まったく違う音色をかもし出すヴァイオリン演奏だが、こういった国際コンクールの場合は、ナショナリティが色濃くにじむから実に面白い。同じメンデルスゾーンでも、イタリア人が弾くと、喜怒哀楽がはっきりしていて、涙を流しての熱演場面もあり、聴衆もまた、自然に涙ぐんでしまう。

「美しいもの、美しいことを人生の中で最優先したい」

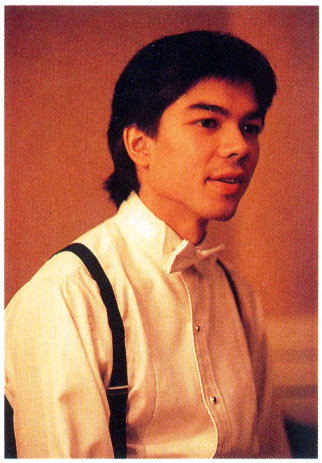
それでヴァイオリニストになったというトランニョックは、現在はNYのジュリアード音楽院の博士課程に学ぶ天才肌の青年だが、エキゾチックな混血ゆえか、ミステリアスな演奏と優美な演奏スタイルで、このコンクールの目玉でもある聴衆人気投票による大衆賞も獲得し、人気の的となった。

3位入賞者のお祝いのガラ・コンサート、そして深夜に及ぶパーティが行われるのも実にパリ的であるこのコンクール。音楽芸術に理解が深いフランス人たちの大きな協力に支えられている点もパリならではと感心させられる。参加する演奏家たちを、まったく無償で自宅に滞在させ、ベスト・コンディションの状態で練習が出来る環境を提供してくれる家庭が揃っているのだ。優勝したふたりの日本人女性も、こういった家庭にホームステイし、集中的に練習した。

「チャイコフスキー・コンクールで最終まで残ったのですが、ホテル滞在でひどく体調を崩し、入賞出来なかった。今回優勝出来たのは、ホームステイで手厚く世話をして下さったフランス人の方たちのおかげだと感謝しています」

と言う小林美恵。彼女たちの演奏の一部始終をまるで本当の両親の様にあたたかく見守っていた何組かのフランス人夫妻の姿が印象的であった。

音楽を通して国際交流を図りたい、とこのコンクールを創ったロンとティボーの精神は、こんな形でも脈々と生き続けているのだ。



ステファン・トランニョック

●

ロン=ティボー国際音楽コンクール「ガラ・コンサート」は、1月14日=東京・サントリーホールで、16日=大阪・ザ・シンフォニーホールで開かれる（¥5000〜¥3000）。出演は、小林美恵、景山誠治、ズー・キャン他。同「優勝者リサイタル」は、1月18日=東京・サントリー小ホールにて、小林美恵出演（¥3000）。お問い合せは、☎03-263-4338（NASA）